



“憩室”の妄想

村越 司

私の十二指腸に憩室とかいう小さな卵のような、余計なものがみつかりました。おなかを患って、された検査の結果の一つですが、今のところ膀胱の出口を圧迫している様子もなさそうです。しかし、長く寝ているためか、現在の自分を皮肉られた思いもします。

寝ていると、ふだんは当りまえと思っていたことも、妙に頭にすることがあります。りっぱな人だと身近な親しみをおぼえている人たちが、時にそらそらしい嘘をついたり、公害問題などで立場上、わかりきっているのに原因不明と、うやむやにしたりするのも、やりきれないことです。国際間のいかにも不合理なトラブルなどをみても、人間についての科学がひどく立ち遅れているのが、もどかしくてたまらなくなったりします。

私たちの誇りにしている科学や技術の進歩が、ちんばであり一つの限界にきていることは、よく指摘されるとおりです。広い意味での物理的の科学が、数々の境界領域のブランクを丹念に埋めて、統一的な自然観といったものをもとうとしている一方、これと一番つながりの深い、主として工学的技術の発展のはね返りとして、自然界も人間社会も、おそろしく破壊的なとぼちちりを受けるようになったのです。まさしく人災です。

もしもこういった問題意識をつきつめた上で、必要な人間集団を対象にして、人間の場の理論を多角的に磨き上げながら、その少々高次元のものに及ぶ集団行動の共同研究ができればどうだろうか。地理学者は空間的なマクロの場の理論には強いし、必要な場の抽象化も始終やっています。社会心理学者や文化人類学者と地理学者に、数物などの専門家も組んで、何とかやれないものだろうかと思うのです。

政治家などの研究グループとは違って、それにはまず、ほんとに自由な、そして厳密な理論的研究の先行が必要でしょう。かたよった action research group にならないように十分注意すれば、協力者も資料の便宜も得られるに違いありません。実験・観察さえも、そうむずかしくはないかもしれません。あるいはもう、どこかで現代のメフィストたちが始めているかもしれません。 (1967. 6. 16)